

## 思い出の生物学会活動から

顧問 本多省三

ずっと生物学会にお世話になりながら、最近の忙しさにかまけずいぶんど無沙汰しています。今振り返ると、生物学会誌に弥陀ヶ原湿原の様子を載せたり、発表したりしていたところが懐かしく思い出されます。会長として務めた頃もあったかと思いますが、微力で十分なことも出来なかったと……ともあれ日のたつ早さに驚いています。

いくつか上げてみますと

### ① よく歩いた弥陀ヶ原

アルペンルートが出来た頃、荒れた場所の緑化の仕事や弥陀ヶ原のガキ田の調査によく出かけた。TKKの支援もあり、立山頂上から美女平そして千寿が原（立山駅）まで歩いていないところがないほどすみずみまで歩き通した。

ガキ田の調査に本当に多くの時間をかけた。3000もあるというガキ田全体を巡った感じである。国見岳頂上付近にもかなりあるのには驚いた。

### ② 有峰から4時間の祐延そして東笠山

今は小口川から祐延への道が整備されたが、かつては東笠山へは通常まず有峰から祐延まで歩いて峠を越え4時間、それから道無き道、谷を登りようやく東笠山につく。そこは人が誰もいない夢のような湿原であった。帰りは祐延まで降り、そこからへりて有峰へ、祐延から東笠山・西笠山への登山道も整備してほしい。

### ③ 地衣類を求めて

勤めてまもなく学生科学展に何を出すか生徒とともに考えていた頃、地衣類の専門家に会う機会があり、私はそこへのめり込んでいった。地衣類はどこにでも生育している。木の幹にも石の上にももちろん土の中にも、強い適応力と生きる力を感じた。菌類と藻類の共生体でどんな場所でも生き続ける。

また地衣類は環境の指標生物にもなっている。たとえば桜の木の膚にウメノキゴケがあるとそこは空気のきれいなところなので、どこへいっても木の膚を見る。

### ④ 水無山（みずなしやま）に登る

旧の利賀村そして平・上平村によく通った頃、水無山や三が辻山そして人形山によく登った。春はミズバショウで埋まる水無平湿原の観察、晩秋には洪水で壊れた水無湿原の復元などで水無に行くときは必ず水無山に登る。いつも大きな水無山の看板が熊に鋭くかじられているのにはびっくりしている。

### ⑤ 有峰湖を巡る

昭和36年有峰ダム完成そして翌37年小見→有峰間バス開通、大多和峠まではよく出

かけた。いまも大多和峠へはジュニアナチュラルリスト養成講座の関係でほとんど毎年出かけている。

右岸の有峰湖周ラインからの砥谷遊歩道もなかなかよい。

#### ⑥ 黒部峡谷下の廊下を下る

黒部ダムが昭和38年完成し、下の廊下へ行きやすくなった。これまで何度か黒部ダムから樺平まで歩いているが、最初は昭和43年秋、1日目室堂から黒部ダムの下まで歩き、御前沢小屋に泊めてもらう。翌日5時に出発、樺平まで12時間の歩行、最終夕方5時の軌道に乗る。今はそんな元気はなく、途中阿曾原小屋で1泊、ゆっくりした行程である。10月末が最適の時期、真っ青な空・高い山は雪・歩く道は紅葉で真っ赤、もう最高の気分である。

#### ⑦ 沢杉の思い出

黒部川扇状地の下流域には昔から杉林が発達していたが、扇状地の整備が進みほとんどの杉林は伐採され、現在の杉沢が残っているのみである。しかし、そこにはかつての姿がそのまま残り、維持管理もよくなされ、「杉沢の沢スギ」として多くの観光客を集めている。海岸線一帯がこの姿であればさぞ素晴らしかったであろう。

#### ⑧ 県外の自然観察会

生物学会では多くの県外視察も行ってきた。

・新潟県	マイコミ平	・石川県	奥能登
	田海池湿原	・福井県	九頭竜峡
	佐渡博物館	・長野県	戸隠高原
	境川上流小路川		他

#### ⑨ 教育と研究

生物関係団体の方向性の関係で、生物学会は研究、生物教育研究会は教育中心という流れの中で、私は欲張りで両方の道を歩いてきたような感じである。生物を教える中で不思議なことが出てくると、実際に納得がいくまで現地に行ったり実験をやってみたり、そんな生活が続いた。プロトプラスト融合実験もその一環だった。

#### ⑩ 自然観察や山登りから学ぶ

生物学会としては何と言っても「現場から学ぶ」この精神が一番ではないかと思っている。世界の辺地を回ったり、6000mまで登って地上の酸素の42%しかない世界を体験したり、情報社会であらゆることが分かるが、自分の目で確認することが大切と考えている。

いくつかのことを書いてみましたが、まだまだ全部は書き切れません。今後自分がどう歩んでいくか考える時、生物学会の多くの思い出を振り返りながら、さらに未知なる世界へ進んで行こうという強い思いです。

— 現在調査していること —

チシマザサ（ネマガリダケ）の大侵出一大日平—

さて最近は、ラムサール条約の登録湿地の調査に明け暮れていまして、この1年あつという間に過ぎ去っていきました。今年・来年と続くので、まだまだ忙しいです。その一環として大日平に久しぶりに3度ほど出かけました。びっくりしたのは湿原がササで覆われ、特にガキ田が乾燥、ササが多く侵入している状況であったことです。



写真1 激しいササの侵入



写真2 ササで埋まるガキ田

大日平から称名溪谷に下った時、これも笹藪をくぐっての戦いでありました。降り口までの上りでは、上がるに従ってササの背が高く一面に生えています。別名「ネマガリダケ」の通り、行きの下りでは滑るし足がつかまずくし、帰りの登りでは滑って滑ってなかなか上がれません。10月の夕方明るい内に上がれるか、苦しい苦しい戦いでありました。

何とか大日平に着きほっとしました。

厳しい調査であります。すべての場所を歩き、この目で実際に観察したく、その思いはずっと持ち続け実践していきます。



写真3 大日平から称名溪谷へ



写真4 厳しい称名溪谷を降りる

称名溪谷降り口から100mは全くスベリザサ？ といいたいくらいのネマガリダケ

崩れゆくガキ田—弥陀ヶ原の今とこれから—

生物学会が50周年を迎える頃、私はよく立山に出かけていました。黒部ダムができアルペンルートが開通、でもその陰で荒れた弥陀ヶ原の緑化事業に苦勞していました。最初は緑化に外来種が使われたりしましたが、現地産の必要性が叫ばれ立山の植生が守られた感じがします。しかし現在では温暖化やそれに伴う多くの外来種の侵入など大きな問題が出てきています。

そんな中弥陀ヶ原湿原の調査も進めています。昭和50年2月発行の「会誌15号」でも記載しましたが、当時は本当にみずみずしい弥陀ヶ原でありました。約3000ものガキ田が弥陀ヶ原ホテル下部を中心に広がっていました。

今弥陀ヶ原に入るとかつての弥陀ヶ原の生き生きとして状況はなく、特にホテルから遊歩道を下がっていく場所は何カ所も湿原がえぐられ、粘土層が顔を出しています。ガキ田が多くくっついて大型化したり、湿原の内部に入ってみると笹原の下部に上からは見えない小さい谷が流れ、湿原が崩壊する寸前のところも見られます。

このような変化に対し、遊歩道の整備等はよくなされています。しかし崩壊した湿原が川になっているところは少しは堰など作ってありますがまだまだの感じがします。早くに手当をしないと湿原はどんどん崩壊していきます。雨の日に是非現地を見てほしいです。またミズゴケの減少も激しいものがあります。



写真5 崩壊していく湿原



写真6 雨の日の崩壊地



写真7 ミズゴケ減少によるガキ田の堤防の崩壊